

先端研究拠点事業（拠点形成促進型）事後評価結果

領域・分野	生物学・生物科学
拠点機関名	自然科学研究機構 基礎生物学研究所
研究交流課題名	アフリカツメガエル/ニシツメガエルを用いた機能ゲノム学の推進
採用期間	平成 16 年 2 月 1 日 ~ 平成 18 年 1 月 31 日
日本側コーディネーター（職・氏名）	教授・上野 直人
交流相手国 （国・拠点機関・コーディネーター）	<p>国：英国 拠点機関：ウェルカム財団/癌研究所 コーディネーター：Enrique Amaya</p> <p>国：米国 拠点機関：カリフォルニア大学アーバイン校 コーディネーター：Ken W. -Y. Cho</p> <p>国：カナダ 拠点機関：カルガリー大学 コーディネーター：Peter D.Vize</p>

総合的評価

評価

- A** 共同研究・セミナー・研究者交流の3つの交流態様が効果的に構成され、交流相手国機関等との研究交流が順調に実施されたことにより、当初設定された研究交流目標が達成できている。学術研究、持続的な協力関係の基盤構築、若手研究人材養成、次年度以降の展望のいずれの観点からも、非常に優れた事業を行ったと判断できる。
- B** いくつかの課題はあるが、交流相手国機関等との研究交流は概ね順調に実施され、当初設定された研究交流目標もほぼ達成できている。学術研究、持続的な協力関係の基盤構築、若手研究人材養成、次年度意向の展望のいずれの観点からも、優れた事業を行ったと判断できる。
- C** 予想外の困難な状況が発生したなどの理由により、学術研究、持続的な協力関係の基盤構築、若手研究人材養成等の観点からみて課題が多く残り、当初設定された研究交流目標が達成できているとは言い難い。

コメント

当該研究交流課題は、4つの拠点バランスよく協力し、両生類モデル動物を代表する *X. laevis* ならびに *X. tropicalis* について、重複を排除した完全長 cDNA のセットを整備することを目標としており、当該事業にもっともよくマッチした課題と考えられる。

若手研究者育成の観点においては、交流が有効に行われ、少なくとも日本の若い研究者には、一定の効果をもたらしたと思う。国際ワークショップには海外から著名な研究者を招聘しており、ワークショップに参加した若手にとって、分野の大家・創始者と接触できたことは大きな刺激になったことは想像に難しくなく、評価できる。こうした若手研究者の交流関係の育成は、今後の協力関係の維持と発展におおいに資すると同時に、持続的な研究成果となって波及することが期待される。

当該研究交流課題で形成された研究交流ネットワークは、今後の発展の基盤となると考えられる。また、将来アジアにおける研究連携を行うことを視野に入れ、小さな規模で交流を行ったが、これを契機に更にアジアでの連携を発展させることを期待する。

1. 事業の実施状況

事業の実施体制、共同研究やセミナーの実施状況、研究者の交流状況、相手国機関と協力状況等の実施状況についての評価。

評 価
A 非常に優れている。 B 優れている。 C 不十分である。
コメント
<p>日本の自然科学研究機構・基礎生物学研究所、イギリスの Wellcome Trust/Cancer Research UK Institute、アメリカ合衆国 University of California, Irvine、およびカナダ University of Calgary という4組織が中心となっているが、これらの研究拠点は、それぞれが独立に分子生物学的発生的研究の目的から、cDNA を作成、利用し、すぐれた研究成果を挙げてきた研究チームであり、適切な枠組みと考えられる。</p> <p>セミナーや国際的集会は適切な研究交流計画にもとづいてたいへんうまく実施された。予算執行の面では、セミナーのための海外からの研究者招聘と国際学会への国内研究者派遣に重点が置かれている。ゲノム情報、遺伝子発現情報などの基盤整備、データベース化を効率的におこなうためには、それぞれの拠点、協力機関のメンバーが、会合をもち、直接議論し情報を交換することにより、情報の整理、統合を図ることが求められているため、当課題は当事業に適した課題であると考えられる。</p> <p>事業が終了したばかりなので、これらのリソースを用いた国際協力に基づく成果は、まだ論文発表などの形では出ていないが、多岐に渡る内容の研究成果の多くが、複数の拠点の研究者の共著であることから、本事業の成果であると考えられる。</p>

2. これまでの交流を通じての成果

当該研究交流課題を実施したことによる学術的な成果、持続的な協力関係の構築状況、若手研究者の養成への貢献度等、研究交流目標の達成度への評価。

評 価
A 非常に優れている。 <input checked="" type="radio"/> B 優れている。 C 不十分である。
コメント
<p>セミナーや、研究者と情報の交流を図るための国際的集会の開催を頻繁に行うことにより、拠点機関・協力機関を含めた研究ネットワークが形成されているようであり、今後の安定した協力関係の基盤ができたと判断される。</p> <p>共通の実験材料を用いるグループがそれぞれの得意な手法を用いてコミュニティ全体に役立つ複数のリソースをまとめ上げたことは評価できる。また、その協力関係の成果が拠点間の共著論文として多数発表されていることも特筆に価する。</p> <p>若手研究者の関連学会参加が多数行われており、この分野の若手研究者の育成と交流が有効におこなわれたと考えられる。これがどの程度成果に結びついたのかは、この報告書からは不明であるが、国際学会での発表経験が研究者としてのキャリア形成に役立つことは確実である。こうした若手研究者の交流関係の育成は、今後の協力関係の維持と発展におおいに資すると同時に、永続的な研究成果となって波及することが期待される。</p>

3. 次年度以降の展望

次年度以降の研究協力体制の維持・発展に向けた展望における計画の適切さ、具体性、実現可能性への評価。

評 価			
<input checked="" type="radio"/> A	非常に優れている。	<input type="radio"/> B 優れている。	<input type="radio"/> C 不十分である。
コメント			
<p>本研究課題が対象としている <i>X. Laevis</i> ならびに <i>X. tropicalis</i> に関する完全長 cDNA のセットの整備は、かなりの進展をみせたが、最終的な完成には至っていない。当研究課題で整備された研究拠点間の協力関係は、その完成にとってたいへん重要な役割を果たすものと期待される。</p> <p>本年度日本で開催が予定されている国際ツメガエル会議など、今後さらに会議やプロジェクトが企画されるはずである。当該研究交流課題で形成された研究交流ネットワークは、そうした発展の基盤となるであろう。</p> <p>研究協力体制の維持・発展に向けた具体的方策は書かれていないものの、email や internet リソースを用いてコミュニティーの連携が維持・発展できることは容易に想像でき、国際協力のための資金獲得努力がコミュニティー内で継続されていることが伺える。</p>			

4. 事務運営の適切さ・効率性

経費使用における効率性、実施に際しての計画性等への評価。

評 価
<input checked="" type="radio"/> A 適切である。 <input type="radio"/> B おおむね適切である。 <input type="radio"/> C 不十分である。
コメント
<p>支給経費に比して適正な規模の交流が行われており、経費は効率的に執行されている。</p> <p>また、研究交流は年度ごとに十分に練られた計画に基づいて、適切に実施された。</p>